研究会レポート　技術交流研究会（㈳日本技術士会北海道支部）

第 100 回・第 101 回　研究会報告

■第 100 回技術交流研究会

技術交流研究会は、今から 19 年前の昭和 61 年 8 月 5 日に「工業技術研究会」という名称で異業種交流の場として、建設部門以外の部門（原則として）の技術士 10 人が集まって設立しました。当初は、隔月の開催で年 6 回行われ、その後年 4 回に減りはしましたが、回を重ねて今年の 6 月で 100 回を迎えました。

第 100 回目は研究会ではなく、京王プラザホテル蒼樹庵壱の間で 29 名の会員が出席して情報交換会を開催しました。

伊藤センター会長

大島支部長

情報交換会の様子

菱川元会長

会は大島紀房支部長の祝辞の後、菱川幸雄元会長の乾杯で開宴しました。その後は、当時の思い出話や講師の先生の話など和やかな雰囲気の中で進行して行き、伊藤昌勝センター会長の一本締めでお開きとなりました。

■第 101 回技術交流研究会

第 101 回技術交流研究会が、平成 17 年 9 月 1 日に㈱ドーコン会議室で開催されました。今回は北海道大学公共政策大学院の倉田健児先生に講演いただきました。その概要は以下のとおりです。

地球環境問題はどのようにして「顕在化」したのか

北海道大学公共政策大学院
倉　田　健　児　教授

◆講演要旨

地球環境問題とは一体、どのような問題なのだろうか。この問いに答えることは、結構厄介だ。なぜなら、地球環境問題をどのような性格の問題として認識するかという問題の認識に係る視座を定めなければ、適切な定義ができないからである。

無論、認識の仕方は一様ではない。一般的には地球環境問題を事象的に捉えることが多い。この場合には、温室効果による地球の温暖化、成層圏のオゾンの破壊、海洋汚染、熱帯林の減少、砂漠化や土壌浸食などの土壌悪化、野生生物の種の減少、酸性雨、有害廃棄物の越境移動、開発途上国の公害問題の 9 種類の具体的な事象が地球環境問題として定義される。物理的な現象として地球環境問題を認識したものだ。

今回の講演では、こうした認識の仕方を敢えて採らない。地球環境問題を、これが何故、近年「顕在化」したのかという疑問に答えようとの視点から、まずは考える。ここで、地球環境問題の「発生」とせず「顕在化」としたのは、地球環境問題として議論の俎上に載せられる個々の物理的な現象は、何も最近になって急に発生したわけではない。数十年以上も以前から、事象としては存在し続けているからだ。

こうした事象の発生に対して、科学的な知見に基づく警告は相当に以前から発せられてきた。従って、近年になっての地球環境問題の登場とは、過去から発せられ続けてきた警告が現実の問題として社会に認知されたことを意味する。その結果として、社会がこれらの事象を解決が求められるべき問題として認識したことによって、地球環境問題は「問題」として顕在化することとなったのだ。

警告は相当に以前からなされていたものの、1980 年代も終わりになってはじめて社会は、これら事象に対して解決が求められる問題であるとの位置付けを与えた。社会は何故この時期に、地球環境問題に対してこうした位置付けを与えるようになったのだろうか。

本講演では、社会において地球環境問題が顕在化していくプロセスを追う中で、顕在化に社会が果たした役割に注目したい。その上で、地球環境問題と社会との関連を詳しく見ることにより、地球環境問題をどう性格付けできるのかを示したい。

講演の様子

講演して頂いた倉田教授

■お知らせ

次回の技術交流研究会は、12 月 1 日に「知的財産」をテーマに講演、パネルディスカッションを予定しています。近くなりましたら、EPO を通じてみなさんにお知らせします。

また、技術交流研究会では、会員を随時募集しています。㈳日本技術士会の会員であれば、どなたでも入会できます。

入会を希望される方、研究会に出席を希望される方は、㈳日本技術士会北海道支部事務局（出村）までその旨をご連絡下さい。

（文責：吉野　大仁）